

上を、黒々と大きな影を空に映して二人の人がくる。いかにも印象的だ。そして點線で描かれたゴオホの晝のやうな大きな夕日が、その人の向うにある。しかも土手下の蘆の穂は、一面に光の波だ。

やがて、土手上の人が、立ちとまつたかと思ふと、忽ち一條の噴水が、空に孤を描いて土手下にさんさんとしてかがやきおちる。庄亮と東村と私の三人は、道の上に立つて禮拜したものだ。

土手は見上げる程高かく大斜面をなしてをり、其斜面に細くうねつて路がつづいてゐる。私達はその路を一氣に駆けあがる。

眼界は豁然として展開される。

蘆原、蘆原。見渡す限り一面の枯蘆原だ。そして黄の一角に染め出された渺々たる光景である。向うには赤層をはつきりとあらはした徑十尺に餘る夕日が一つ、まろく、まろく、時に隋圓に、ゆらゆらと蘆原の上にゆらめいてゐるばかり。その夕日を背にして、はるかに見渡す一望は、てしない蘆原の、いかにかそかなる黄のいろいろのなかに、

ほつちりと黒く屋根を見せてゐる家がたゞ一軒ある。この一軒の家が點綴されてゐるので、一層空が潤く、一層蘆原が涯しく感ぜられる。兎に角土手の上に坐らうといふので、私達は枯草のなかに三人並んで坐る。そして、またあたりをながめるのである。

今日は何といふ静けさであらう。空氣があかい夕日の光線で薫醸されてゐて、ほんにとろりとしてゐる。蘆原の蘆の一穂さへ揺れ動くとはしない。

私は草のなかにゐて、両手でもちそへた紅い大きな林檎に齒をあてた。齒がなめらかな林檎のうすい皮を破つて、軟かい肉に深く喰ひ入ると、さくりとして二つに割れる。黒い種子を二つ三つならべたしんがうす青みをおびてゐる。澁い好もしい酸味はここから來るのだなと思ひながら、私は、さくり、さくりたべながら、夕日を見てゐる。

吉植君はしきりに酒のないことをさみしがつてゐる。なるほど私は林檎を一つたべて、果實の新鮮味に觸れて、この静かな寂しい自然のなかに、自分を描いてゐるといふ心持を何となく有難いものに思つてゐるのである。その心持を吉植君の好きな酒に移して考へてみると、はつきりと氣分がわかつてくる。風景をながめながら、何が自分の好きなものをたべるといふことは、單に食慾

をみたす丈では決してない。自然とおのれとを一つにする欲求からである。まして酒に於ては一層その感がふかい。まして庄亮に於てはさらにその感が深いのだらう。と思ひながら、立ちあがつて、土提を駆けおりて印旛落の渡場へ急いだ。

2

私達は、土手をおりて、三人ならんで細い道を歩いて行くと、すぐ渡守の家の裏に出る。小高く土を盛りあげた岡めく家居のうしろに、篠がしろい袴をつけて、すいすいと數百本立ちならんでゐる。そのそばをとほつて家の前に廻ると、庭にもりあけてある白菜がひやりと寒い。氣がつくと印旛沼の川面が、蘆の葉を透いて見える。細い投網船が一つ、黒い人影を二つ乗せてゐるのが見える。私達は、兎角して川岸に出た。

對岸に頬かぶりをした人が、寒さうに川づらを眺めてゐる。

「おおう。」と呼ぶと、

「おおう。」と應へる。然しその聲は頬かぶりの人からでなく、かけ下の船の女船頭から發せられたのだ。

音もなく、水の上をすべつて船が岸に寄せられると、どかどかと乗り込む。川上をみると、酒のやうに赤い夕日が、とろりとしたいろを水に浸してゐる。私達の顔も、女船頭の顔もみな赤く染つてゐる。

冷たい白い錢が二個、船の板子の上に光つてゐる。密林の上をまたいて私達は岸にあがると、ぎつしりとした篠竹の密林である。そのなかに路が細く通つてゐる。路の傍に小さな後架が一つ、寂びいろをみせてひそまつてゐる。

この後架のやうな、小さい家をつづつ建てて、

「お早う。」

「お早う。」

と、顔だけだして挨拶をしたら面白からうとおもふ。このあひだ小田原に行つた時に、二人で印旛に家建てやうではないかと白秋と話をしたのを思ひ出したのだ。この位の家なら、蘆原のなかをあちこち持ち運べさうだ。丸木柱の一間きりの家建てるかな。柱は山毛櫨か何かの原木

を山から伐出したまゝの丸太で壁なしの四方あけばなしの、蘆の葉葺の小舎をたてるかな。建てるには春さきがよいな。水つほい伐りたての山毛櫨丸太から、青く芽をふいたら愉快だらうなどと考へながら行く。また一軒家がある。夏きた時は、此家が殆んど蘆に埋れてゐた。そして、裸の童子が一人家かげから出て来て私達をおどろいたやうな顔をしてみてるものだ。今は周囲の蘆が刈られてしまつたので、家がまる出しになつて空の下に投出れてゐるやうだ。

日が暮れさうになつて来た。さあ急がうと口にはいひながら、矢張りほつり、ほつり歩いて行く。道は不動尊の立つてゐる土手にはひあがつてゐる。

この土手の上にあがると、さらにさらにひろびろとした海のやうな光景が、ひっそり閑として、私達を迎へてくれるのである。土手上の一本道は、直ぐに北から南に走つてゐる。

私はふとこゝろでをしながら、二人の友のあとを歩いて行く。枯蘆の間からところどころ沼の水がうすしろく光つてゐるのが、夕靄のなかに見えて、寒さがしみじみとして親しみを増す。土手下の家の屋根の棟の上に、牡牝の鶏が二羽、しんほりとして體を重ねるやうにしてとまつてゐる。

戸がしまつてゐるので、塹にかへれず、日はくれかかると、暗くはなる。そこで仕方なしに屋根の上に登つて、ほのかに暮れのこゝろの光をたよつて、家人の歸るのをまつてゐるのであらう。

沼はもうとつぷりと暮れかかつてゐる。枯蘆の葉が黒く水に逆しまに映つてゐる。

土手をおりると、もうすぐ吉植君の家である。

頬 白

かすかな意識が私にかへつて来た。たとへば黎明のうすあかりである。そのうすあかりの世界でほほじろが一つ鳴いてゐる。

それが下の方で鳴いてゐるやうに感じられる。はるかに下の方で……。ほそほそと、一つ、ただ一つだけ、ほれほれと、寂しさうに。……軽くどちた臉にうす赤く外光が沁みて、顔の半面に感覺がない、といふことが、心にどきりと来る。

さうだ。自分はさつき足をすべらして雪溪に陥没^はつた、と思つたが、そのままあたりが暗くなつて、ぐらぐらと山が動揺すると同時に、ふと意識を失つて仕舞つた。

それが、今、たしかに私は落葉の上に臥てゐるらしい。日の光さへほつかりと體に感じられる。誰か私の枕元にゐる。私の名を呼んでゐる。あ、Mさんだ、さうさうY君もゐる。私は思ひきつて、眼を細くあいてみた。

これは明るい、まるではじめて此世に生れて来た時に感じる明るさだ。頭の上にすくすくと白く立つてゐる落葉樹の梢が見える。その梢はみな自分の體からでも出てゐるやうに感じられるほど私のすぐそばにある。そしてその上は青い青い大空の濡れいろだ。

そして、やつぱり、ただ一つほほじろがないてゐる。そのほほじろが私の死體をながめながら鳴いてゐるやうにも思はれる。

私は、はつきりと「私」をとりかへした。

三月末の、奥秩父の原生林の、明るい山毛櫨帯の外光のなかに、蘇生したことを惜しまれるほどのうららかさである。

谷一つ向うは、白熊のやうなまつしろな山が、空を割つてゐる。白々と雪をきた山はふつくらとしたまろみをもつてゐる、まして谷谷の陰影は一層肉體を聯想せしめる。尾根に群立つ落葉樹の群落は熊の脊に光る粗い毛並を思はせる。そして一面にほつと雪解黨が立ち罩めて、ところどころに黒い梅がさし毛のやうに點じられてゐる。

その一體の山を前にして——さうだ。その山には今正午に近い日が反射して明るい虹を描き、

或は紫ふかい陰影を造つてゐる——私は直径八九尺もあらうといふ栃の裸木の下に、ほつかりと眼をあいたのである。

私の生命は、日向山の春の残雪の上にかすかに顛へてゐた。

ほほじろがまた啼いてゐる。栃の木のでつべんで、私の方を見守りながら、ほれほれと鳴いてゐる。

私は生きかへつたことを今は悦んだ。

何といふうらかな目の光だらう、と私はあたりを見廻した。

二人の同行者が、私の生命を大事さうに見守つてゐてくれた。そして、もう一人の同行者は、ここから一里ばかりある村に私の爲めに走つたといふことだ。

私は立ちあがらうとして、ふらふらと眩暈を感じた。前面の白熊の山が大動揺してゐる。

私は、Mさんの肩に靠れて眼をとぢた。

落葉のなかからレモンの匂ひがほのかにすると思つた。然しそれは、私の頭に結びつけられてあつた凍雪こりゆきのほひであつた。

私はMさんの手から雪を啣ませて貰つた。

冷たさが齒にしみる。そしてからだ全體にその雪の感覚がながれた。

私は、靜かにまた落葉の上に仰臥する。

と、ほほじろが再び啼き出した。私のすぐそばの灌木の梢あたりで、ほそほそと寂しく、ほれほれと楽しげに……

私は、硬い氷の上に仆れ、横顔をしたたかに打つて、浅い雪溪に轉落したのを、Mさん達にかつぎ出されて栃の裸木の根元の落葉の上に臥されたのである。そして、左の片面から頭にかけて一面に痲痺してゐる。不思議に痛みはないが、齒を咬み合はせやうとすると、ぐざぐざに頬骨が挫けさうに思はれる。手をあててみると顔がふだんの二倍位に感じられる。

が、不思議に私は恍惚とした心境にある。このままほつかりとして死んで行けたら幸福であらうと思はれる位に、心がほんやりとしてゐる。

聽て、村から來た強力の爺さんの脊負梯子に、私の體は結びつけられた。

ゆらゆらと體が宙にういた様に思はれたが、次ぎの瞬間には人に負はれたといふ楽しさに、そ

の不安は掻き消されて、少し聲をたてて笑つた程であつた。

ゆさゆさと負はれて行く心持——頬白に顔を見られるのが何となしに羞かしいといふ様なころよさである。

むき出しの足を南風にふかせながら、田圃なかの土手道を母の脊に負はれて行つた稚い頃をふと思ひ出す。ぶらりとながく垂れた足のさきで、土手にしろく穂を出した茅花に觸らうとした時の心持。それがつひ昨日のことでもあるやうに、そして、つひそこに昨日の私が母に脊負はれて行くやうにさへ思はれる。私は眼をそつとあけてみる。

何といふ木の花だらう。うす黄に總のやうに垂れて、ところどころに咲いてゐる。そして、やっぱり頬白がないてゐる。

私は脊かなから、「おぢさん」とつひ呼びかけて苦笑した。おぢさんといふ言葉が果して私を脊負つてゐる人にふさはしかつたかどうかと思つたからである。が、爺は、思つたよりは軽く朗かな聲で、

「はい、何かな。」と返辭をしてくれた。

「重くはないかね。」

「なに、重えこたあなえ。わしら、毎日五貫俵（木炭）を五俵脊負つて里に出るだから。」

「さうか、でも炭よか脊負ひ悪くからう。」

「いんにやお前さんは土釜四俵分か無え。」

私は思はず聲をあけて笑つた。土釜といふのは石釜で焼く堅炭に對して、軟かくて軽い黒炭のことをいふのである。

黒炭は火がつき易い代りに、また燃焼も早い。そして黒炭は堅炭のやうにはねることがない。よく燃焼するが、ねない土釜炭か俺は？と、考へると少しをかしくなる

顔の疵がツキツキと少し痛み出して來たが、気分はからりと霽れて晴天の感がある。

と、はるか脚下の谷底から、びようびようといふ犬の啼聲がきこえてくる。——私は日向山の伐採あとの明るい山の中腹にわづかに通つてゐる蟻の道のやうな山道を背負はれて行つた。——右は急傾斜の線が流れて、陰影の多い深谷に一氣に山が傾いてゐる。犬の啼聲につづいて銃聲が

氣疎く聞えてくる。

「おぢさん。」あれは何か獵つてゐるのかね。」

「へえ、多分鹿でがせうよ。」

私は、鹿のやうな可憐な獸をどうして禁獵しないだらうと思つた。あの鹿のやさしげな眼を思ひ出すと鳥渡感傷的な氣分になる。

道が村に近くなつて、橋を一つ渡ると犬の啼きごゑや銃聲がきこえなくなる。私はほつとする。そしてまた楽しくゆさゆさとゆられて行く。

道のわきをみると、五六歳の二人の童子が立つて私の方を指さして笑つてゐる。

向うから馬がくる。道のはたに避けて通さうとして、また馬にまで顔を見られる。

「早えすぐ春だなあ。」

「さうだ、すぐに春だ。」と私の老爺と馬方とが挨拶してゐる。

青麥でも喰べた來たらしい馬の匂ひがふんと鼻さきにくる。

どこかでまだ頬白が鳴いてゐる。

馬

私を乗せた馬は、ゆさゆさと重い鬣こがみを朝風になびかせながら、頸をふり、後足を蹴上げるやうな氣配さへ示して、遮し無じ二馳ちせ出さうとしてゐる。脇腹が心持汗ばんで、毛並けの光澤つやが黒く油をながしたやうである。そして、呼吸が荒く、時折空の方に顔を向けて嘶く。

手綱を馬夫が放せば、そのまま下り坂を一氣に走り出しさうである。

今朝、私の馬より二三分さきに早立ちした二頭の牝馬があつた。その馬はもうはるかに小一里もさきに行つてゐる筈であるにもかかはらず、牡馬の嗅覺の鋭さはその牝馬の體臭を感じてゐるのである。

その話を馬夫からきいて私は鳥渡感心した。なるほどなと思つた。それではその牝馬に追ひつかせやうぢやないかと馬夫に相談すると、馬夫もまた喜んで應じた。

谷向うの日蔭の山にはまだ雪が白く光つてゐるが、谷一つへだてただけの日向の山々は、早春

の日の光を感じて、雑木がもう芽を吹きかけてゐる。何の木か眞青にわか葉してゐるのを見て私は驚いた。小さな蛾のやうな蝶が道ばたに群がり湧いてゐる。

山の斜面の畑には麥が青く、村々には梅が咲いてゐる。

聽て、私の馬は小一時ばかりしてさきの牝馬に追いついた。

とみると、黒い馬の脊に青い杉の葉をさしてその下に蕙づつみにしたものをつけてゐる。それはたしかに鹿であつた。近づくとき小さな仔鹿の顔が蕙の下から覗いてゐる。

私は昨日脊負はれて山を歸るときにきいた銃聲を思ひ出して、再び寂しくなつた。

うたれた仔鹿を脊負つて此馬はどこへ行くのであらう。馬は自分に近い同じ獸の死骸を背につけてゐることを何と思つてゐることだらうか。

ここでもまた頬白がないてゐる。

みなかみの山

これは素晴らしい大きな蛾だ。

そして何といふ夢のやうな美しくさであらう。

全身純白なボアに包まれて、翅は粉ほいうすみどり、眉だけが黄いろく畑つてゐる。大きさは掌をひろげた程で、静けさは雪のやうである。

道は雨にあらはれた赭土の光澤をふくんで、日光が一面に篩はれてゐる。

明るさは數千尺の山腹の紫外線である。

静かなのは此の眠れる蛾の存在である。

私は鳥渡不思議な妄想に捉はれやうとしてぢつと地上の蛾を見た。眉一つ動かさうとせぬ蛾の眠りは日光のなかにいかにも楽しさうだ。

然し、私は静かに手をのべて觸れてみた。指さきからつとある鋭い感覚が來ることを豫期して

ゐたのに、これは餘りにうつとりとした気分である。

蛾は私の掌の上に移された。

眠つてゐると思つたのは、靜かに死んでゐたのである。

私はつと驚きにうたれる。

日光のなかに、今、私の掌の上に靜かに死んでゐる蛾の存在としては餘りに美しく、物靜かで生采がある。が、此の蛾はその華かにして明るき性的陶醉の完成をなしとけて、思ひ残すこともなく美しくしき自然死によつて生を淨化せられてゐるのである。

私は、何といふことなしに羞恥に似たものを此の蛾から受取つた。

此の羞恥に似た心持を今説明すべく私には言葉がない。

私は、その蛾を道ばたの露にぬれた小羊齒の葉のかけに靜かにおいてまた歩き出す。

私の眼にはちろりと銀緑に光る數寸の青とかけかある。ちろりと草にかくれて、ちろりと日に光る。

私の眼の前には若木の合歡が日に靜かに立つてゐる。黄いろい蝶が二つ三つその合歡の木に觸れては離れ、ひらひらと觸れては離れてゐる。

合歡は午前日光と微風と、清澄にして澱みなき空氣などを歡んで、その頼かな葉を全く生き生きと醒めしめ、生き生きとのぼしてゐる。

私はその木の下をとほつて行く。

私の前に一本の巨大なる檜が立つてゐる。

全樹の葉に風がゐる。日の光がゐる。此の木は如何にも親しみをもつてゐる。空氣の層の深い水源地帯の原生林に、私は何といふことなしに、お、此處にゐたかと、舊友にあつたやうな喜びを感じるのである。

私の前には、山毛櫨が純白な幹を空に斜めに走らせてゐる。どうも此木の幹は人の肉體を感じさせる。指でもふれると、ひくりと動きさうである。然し見あげる山の斜面に、すすくと群立つてゐる姿は、私をして樹木の生命を思はせる。裸かな樹木の肌を思はせる。

そして、少し行くと数本の桂が道ばたに立つてゐる。此の木の肌は一種のいらだたい刺戟を感じさせる。が、その葉の一葉一葉は枝頭にあつて對生し、可憐に、圓狀心臟型のまる葉を風に揺がせてゐる。葉の色を透して下からみあげたなつかしさは、此木の葉のもつ先天的ななつかしさである。慰められるものがある。

栗の木がある。枝頭にほんとに小さい青い、がをつけてゐる。もう秋かなと思はせる。そして青いかなかなが啼いてゐる。栗の木のそばをとほつて少し行くと、道が谷の上に出る。視野が忽然として展開される。

秋風、秋風。みよ、吾妻川上流の潤葉樹林を谷底から一面に波うつて吹きあけてくる風の流れた。そして、空には雲がしろくながれてゐる。向うをみると草山の中腹を馬が一疋ほつちりと黒く行く。それが黒蟻ほどに見える。

あとから人が何か背負つて行く。

私は自然にほんやりとして眠りに奪られやうとした。頬にちらちらと日の光がこぼれる。

何といふ楽しさであらう。

そして、何といふ物靜かな境地であらう。

私は吾妻川水上の野天湯に今浸つてゐる。此温泉は大氣よりは稍あたたかく、人肌ほどの微温にたたへて、湯壺の底の青石の面がなめらかに光つてゐる。

すほりと頸までしづめると、ぬるま湯はあふれて日に光りながら河原に流れる。

河原と言つても狭く青い岩がつばらかにならんでゐる。そして、湯に入つてゐながら瀧がみられる。それで瀧見の湯といふ。

私は四萬の宿屋から山越しに小一時間かかつて毎日此處にくる。いつでもだれ一人這入つてゐる人はない。ほつちりと私一人である。

私は傍の太い藤蔓に着物をぬいてかける。帽子を山菅の上におく。そして、青天の下に素裸になつて、しづかに、なるべくその湯をおどろかさぬやうにして體をしづめる。坐ると恰度頸のところまで浸す湯壺の深さである。湯壺と言つても自然石をくりぬいて三四疊大にしたものだ。温泉はそこから四五尺はなれた崖下の岩間から滲み出してゐる。こころみに口に含むと淡々として

無味である。ほのかな鹽類泉らしい匂ひがする。

私は、いつまでも、いつまでも浸つてゐる。いつまで浸つてゐてもあたたかくもならぬ代りに、また冷えもせぬ液状の大氣である。

私はすつほりと全身を入れて、後頭部を岩にもたせながら瀧をみてゐる。それだけで私は満足なのである、楽しさは此温泉の微温と同じ程度の楽しさである。

そして私はいろ／＼なことを空想する。

私は時代を超越して仕舞ふ。時を忘れて仕舞ふ。唯一點の仄かな存在として私の生命を此湯のうちに盪してゐる。

そして、つひうと／＼とよい心持になる。

ほんとに誰一人來る人はない此の野天湯に私は私の存在を有難いものに思ふ。

秋だといふに蕨が土をもたけて頭を出してゐる。ほんとの早蕨だ。そしてかなかながなき木々には秋らしい風が吹く。

山行けば晝かなかなが啼いてをりさわらび萌えて春かと思ふに

といふ古い調子の歌が自然に口吟まれる。青い栗のいがが枝になり、その下に蕨が萌えてゐる。

深山釣鐘草が咲いてゐる。白いし、ようまの花が咲いてゐる。此し、ようまの花をみると、心がしんとなる。

山路きてし、ようまの白き花みれば心しづかに澄むかと思へり

といふ歌が即興的に浮んでくる。蝶がひらひらと來てふと鼻のさきにとまる。

何といふことなしに微笑もされる。餘り人間をみたことのない深山みやまの蝶は、人も木も同じに見えるに違ひない。

ちらちらと光つて草間を水がながれて行く。草の葉で掬つて一すすり。また蝶が私の顔のまはりをひら／＼とぶ。

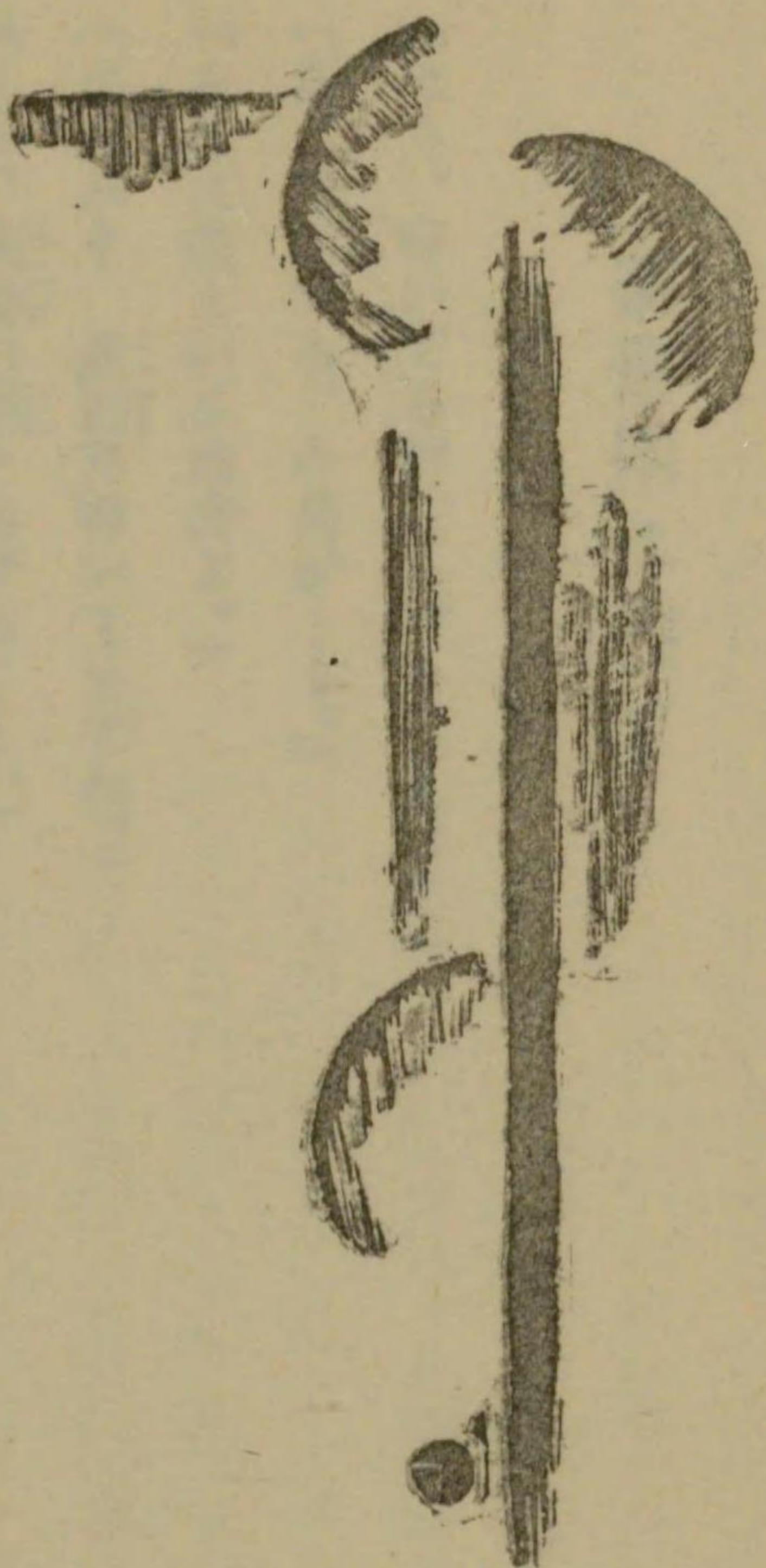
一本のビール壘にさされた深山釣鐘草のあはれさである。此花は黒く見えるほど紫がふかく、夜になつても花瓣を閉づることをしない。壘のそばには茶飲み茶碗に水が盛られ、黒い幼い山椒

魚が腹を茶碗の底にすひつけてひそまり返つてゐる。そして、そのそばに黒いインク壺が一つ。ただそれだけの三つの静物が簡素な机の上におかれてゐる。

二人の子供達はもう疾うに深い眠りに入つて仕舞つて、山の温泉宿の夏の夜は秋らしく、閉てた障子の紙さへしつとりと濕らせて、きりぎりすが軒下の山桑の葉あたりで涼しくないてゐる。茶碗のなかで、ときをり黒く山椒魚が動く。

その都度うすくらしい電燈の灯かけがゆらゆらと揺れて、やがて前より一層びつたりとした姿になる。

大正十五年上州四萬温泉にて



人と樹木

藁蒲團に寝て

「ほら、啼いてるだらう。きこえる？」

「あ、啼いてる、小鳥が……。」

「あれは鶇といふ鳥だよ。」

「つぐみ？ 赤楊で啼いてますね。」

「さう、赤楊の梢ッほでね……。」

「一羽でないの、お父さん。」

「ああ一羽らしいね。」

「雪がふつたので迷兒になつたのでせう。」

「さうかも知れないね。」

私はこの二三日來腹を痛めて寝てゐる。私と並んで長女の妙子がこれも一週間程前から感冒で

藁蒲團に寝て

ねてゐる。二人ともたいした苦痛もない、むしろ病んで寝てゐることの楽しさを意識してゐる。

私達の寝てゐる室は、震災の年に私の家裏を流れてゐる昔の小川（今は排水路）添ひの石垣に近く建増した十疊の平家で、床にはコルクを張りつめてある。夏はそのコルクの上に直に床をとるが、冬は寒い感じがするので、——その實疊よりは遙かにあたたかいが——三つ折りの藁蒲團を置いて、その上に床をとることにしてある。だから床からは小一尺高い寢臺に寝てゐるやうな気分もある。

私達はその藁蒲團の上に仰向けに並んで寝ながら、私達の寢室の屋根の上に枝を張つてゐる赤楊——その赤楊は今花ざかりである——の梢に来て、寒く鋭い金屬性のやうな聲を朝空に響かせてゐる鶯に就て話してゐるところである。

二日前に降つた雪は、もう木の枝や葉には流れてあともないが、日かけの庭一面に白く凍てつてゐることだらう。屋根の北裏にもまだらに残つてゐることが想像出来る。

ところまだらに消え残つた春の雪をみわたして、赤楊の梢で朝日に胸毛をあたたためながら、北の方を向いて啼いてゐる鶯の姿が眼に見えるやうだ。

いつか私は鶯とせきざろとを連想した短文を書いたことがあつた。雀が竹林の旅僧であり、雲雀が小樂士であるならば、雀は私に寂しいせきざろを連想させずにはおかぬ。

さてそのせきざろの鶯の眼には、今赤楊の梢から残雪まだらなる射的場の土手、野の烟突、空にそそり立つ無線電信の柱の尖り、村落、林、岡の幾つもの彼方に、白金のやうに光つてゐる秩父の山塊が、かつきりと盛上つて映つてゐることであらう。とおもふと三峰連山から、白岩、破不の尾根にかけて大うねりにうねつてゐる大山脈が、雪をかついでさながら女人の胸のやうに盛上つて、大空のもとにその裸體のすばらしい線を晒してゐるさまが思はれる。その山裏の荒川の水源地帯の原生林の鬱茂たるさまが思はれる。視野のかぎり、一帯の大森林帯の射光であるり、雪におとす影の明るさであり、空の青さである。山原の遙かなる斜面である。そのはるかなる斜面に叢立つ落葉樹が、あちこちで、音もなく空に圓い線を描いては雪の上いきらきらと光りながら仆れる。ほつつり、ほつつりと黒い人かけが胡麻の實ほどに見える。ところどころに幾筋かうす青い、また紫色の烟が炭竈から立ち昇つてゐるのがみえる。さうだ私は腹の恢復次第秩父の山に行かねばならぬ。あのまつしろい雪の堆積のなかに没入して行く姿が自分ながらいとしい

位だ。伐採し、炭を焼き、盆木を割り、樫を曳き、トロを走らせ、大鋸を以て木を挽く人々の群れに入つて生活することを空想し、半ば實行し、そして、年一年と谷々深く喰ひ入り、山々遙かに伐採し、そしてそのあとより青々と植林して行くことの楽しさを思ふ。山林伐採は自然の破壊であるやうにさへ思はれたこともあつたが、原生林は伐採すべき時に伐採せずして放棄して置くと、樹種によつては自然に樹齡が來て枯れ、天然に更新して行く。今はその天然更新よりさきに伐採すべきを伐採してあとより青々と杉や檜を植樹して行く。私は最初より七八年前、書齋より街上に、街上より原生林に己れの生活を轉換することのやむなき欲求から出發したのであつたが、そして、その自分の一つの仕事とならうといふことは豫期しなかつたが、今ではあと三年や五年では止められさうになくなつた。廣袤拾餘里に亘る秩父の森林は、上、信、甲、武の四ヶ國に跨つてゐて、あと十年や十五年伐採した處で、なかなか伐り盡しさうもないし、また伐採したあとを黒々とした杉檜林にすることも容易なことでもなからう。が要するに私の思ふのは原始的な森林生活者の生活である——といふやうなことを寝ながら今更らしく考へてゐる。これはいつも考へいつも言つてゐる事で一向に面白くもないであらうが、子供と二人で寝ながら考へてゐると何と

なく楽しくなる。ましてこの病室の硝子といふ硝子がずつと曇る程あたたくしてくれてゐる二つの火鉢の炭こそは、あの鶉のみわたしてゐる秩父の山から來たのだと思ふと楽しくも忝けなくもなる。二つの火鉢で燃す炭を一つの火鉢に移して、少し位は寒くとも餘りに浪費せぬことだ。何だか眞實山の人々に對してすまぬやうな氣持にならせられる。

然し、山に入つて伐採植林し、また土地を開墾して耕作することだけ、が生活の意義にはならぬ。私はいつの頃よりか、働くといふことの楽しさでなければならぬところに生活の基調を見出してゐた。そして思つた程に楽しくも悲しくもないといふ微温的的人生觀に堪へられなくなつてゐる。人の生活は涙から、汗から初まつてはゐない。人の生活は笑ひから初つてゐる。楽しく明るく朗らかな、暢氣な、氣ままな笑ひから出發してゐる。そして人間いくつになつても子供の心でありたく、子供のもつ笑ひと、子供の樂しむ遊戯を樂しみたいと思ふのは良寛ばかりではない。楽しんで行へば不善もまた善になり、苦んで行へば善もまた不善になる。——と私は考へてゐる

さて私の思はまた最初の鶉にかへり、鶉のとまつてゐる赤楊にかへる。この寢室の屋根の上に

枝をひろけてゐる赤楊は、よく今迄書いた通り百年以上たつてゐる烏渡一抱へはある。樺はこの邊に何本も立つてゐるが、赤楊はこれが一本丈武藏野時代の野の匂を残してゐるだけのである、そして、その赤楊の下が昔の大根の洗ひ場であつたと言はれてゐる小川であり、今ではそれが下水の排水路になつてゐる。その排水路の石垣のきには、粗硬な皮膚を日に晒し、細かい枝に遠眼には何も色彩のない、そして手にとつてみると驚くべき澁い色彩の含まれてゐる花を一面に風に揺らがせてゐる赤楊よ、おまへは既に三四年前に横暴なる隣家の差配に伐り付けられるところであつた。この樹にはまだ樹齡が來てゐない、まだ五十年や百年は充分生長し得られる素質がある。それを隣家の差配は伐らうとした。そのわけは、この赤楊はたしかに私の庭の一部に根をおろしてゐるが、枝の多くは下水向うの隣家の方へ擴がつてゐる。その隣家がまた私と同じ姓だから少し面白い。その同姓の隣家は私の家よりは地盤が四五尺程低い。その赤楊の木が枝を張つてゐる下が、因果と三坪ほどの菜園になつてゐる。この木の伐採を申込んで來た理由は、その菜園保護のためである。私は眼のつりあがつた月夜の神経質の蟹（月夜の蟹は肉が落ちて瘦せてゐる）のやうな差配に對つて哀願したが、いかなきく差配ではなかつた。とう／＼二三人出入りの植木屋を呼ん

で來て、菜園の上を掩うてゐる枝の大きな奴をすんすんと鋸で挽きおろして仕舞つた。夏のことである／＼その狭い菜園は青い赤楊の枝葉で埋れて仕舞つた。その有様をみてまた横暴なる月夜の蟹は、「これは君の方の樹の枝だから引き取れ」といふ難題だ。私は全く痛ましい氣持で枝のおろされるのを見てゐた。原生林で自分が伐採してゐる木の姿を、寧ろ快適に、心の亢奮をさへ感じて見てゐる私が、この矛盾はどうした事だらう。一枝をきるものは一指を切ると言ふ言葉が痛く心に響いて來る。

その差配の言葉をきいてゐた植木屋の老爺は、自分ですんすんと整理して十束ほどの束にした「俺が貰つて行く」と無愛相な表情をして、まだ三時すぎたばかりなのに、仕事をやめて歸つて仕舞つた。

その植木屋の爺は「俺が子供の頃さん登つて遊んだ赤楊だ、主人の言ひつけで仕方なく枝はおろしたが、そんなに邪魔にされちゃ俺が承知出來ねえ。何も知らねえ人の眼から見れば唯のつまらぬ雑木かも知れねえが、俺には忘れられねえ樹だ。」と、ぶつ／＼口小言を言つてゐた。私はその言葉をいかばかり嬉しく思つたか知れなかつた。私は手もがれたやうな赤楊の木の姿を

見上げて、あはれに思つたのは決して軽い感傷からではなかつた。

すると一ヶ月たとうぬちにあの九月の大震災で、私達の今寝てゐる部屋も既のことに石垣が崩壊して仆れようとしたのを、僅に土臺石の下に入れた松丸太のために助けられた。隣家は埋立ての低地に建つてゐた事として、少なからず傾いて仕舞つた、そして、起さうとしてもなかなか起きさうになかつた。

すると、四五日して、私の家の玄關に訪ふ人があつた。出てみると其處に白足袋跣の例の月夜の蟹が眼をつりあけて立つてゐる。これ迄何かといふと此の蟹は、赤楊の枝おろしを初めとして月に一度位はきつと私の家の者を叱かりつけたり、怒つたりしたものだつた。それは赤楊ばかりでなく、新築したこの寢室が癪であつたらしいのである。その瘦せた月夜の蟹が今度は愈々玄關からやつて來たといふのは、些か意外であり、それに容易ならぬ難問題をもつて來たと直感されたので、私は思ひきり無愛相に「何か御用ですか」と、今度は機先を制して此方から叱りつけてやつた。すると意外な事があるものである。普斷あれ程眼を吊上げて怒鳴つた彼れは、びよこつと一つお辭儀をしたものだ。

「おや、これは變だ、ことによると地震で氣が狂つたか。」と私は内心少しく懼れた。すると彼はまた一揖して、滑稽な程言葉を低く、

「實はまた赤楊のことで參りました。」との事だ。「此奴太い奴だ、あんなに枝をおろしてまだ飽足らないで幹迄伐らせる。」といふのかと、私は腹が立つて怒鳴りつけようかとさへ思つた。處が意外なるかな、赤楊を伐るのではない。枝迄おろして虐めた赤楊に助けて貰ひたいのだといふ。

此奴愈々氣が變だと私は思つた。

彼は額の汗を掌で拭ひて、こんな我がままな御願ひが言へたことではないが、實は地震で家が傾いて、いかに仕事師がきて起さうとしても充分に起きない。でいろ／＼苦心の結果、あの赤楊にワイヤを巻きつけて起せば、思ふ様に直ると仕事師が言ふので、實は高い罫を跨いて御願ひに來たといふのだ。罫處か垣でも屋根でも越えて來る月夜蟹だが、有繫に枝を卸したり、今迄に散々に威張つた手前辛いことは辛かつたらう。

そこで、私も困つた。ワイヤを赤楊に巻きつけて家を起せば難なく起きる。赤楊にとつては枝を卸されるに比べたら何等の苦痛でも勞力でもないが、既に枝を卸して仕舞つて、おまけにその

枝途碌に處理しなかつた彼の事である。

「私には解らんから、赤楊にきいてくれ、」と言つて、私ずんずん引越んで仕舞つた。

月夜蟹は痛く弱つたとみえて、暫らく歸らうとはせず、玄關に腰をおろしてゐた。

私は一旦引込んでみたが、些か氣の毒にもなつて來たので、何とか言つてやらうと思つて玄關に出て行くまに、可笑しくなつてつい笑つて仕舞つた。そして悄しやげた彼の顔を見ると、「今、赤楊にきいてみたら、大抵の事なら承知出來ないが、家を起すためなら我慢するさうです。」と言つてやつた。

彼は頭をびよこ／＼さけて、白足袋の裏をみてせて駈け出して行つた。

私は今寝ながら、その時のことを思ひ出して、つひ聲に出して笑つて仕舞つた。

雑草園小景

その一

泰山木の花の咲く頃となつた。春の雪で一枝折れたために少し淋しくなつたし、去年澤山咲いたためでもあらうが、餘り苔が見えぬと思つてゐたが、この頃になると葉の間に大きな青いのが二三十ふくらんで來た。昨日その一輪がほつたりと咲いた。今ベンをとつてゐる私の机の前の二階の窓から、青桐の葉越しに、ひらききつた大きな純白な花が、ゆらゆらと風に揺られてゐるのが見える。朝曇の空からは霧雨でも烟つて來さうなしつとりとした淡い外光に浸つて、おほらかにうすくもりのした珠を見るやうな感じのするこの花は、ほんとに自然の清淨さを思はせ、また木の花の静けさを思はせる。と、白い蝶が、ひらひらとどこからか風に吹かれて來た。そしてみるみる泰山木の青葉の層をひらひらと舞ひのほつて行く。

雑草園の隅、泰山木の手前の丸葉山牛蒡の雄大さはどうだ。とても草とは思はれぬ。大きな洋傘をさしてゐてもその蔭にかくれさうだ。二人でも三人でもかくれさうにおもふ。丈は八尺にの

ほりさうだ。この草は莖も太く葉も人の顔位大きい、花こそ可憐である。莖腋から青い細い花梗を長く抽いて、さきに穂のやうな三四寸の白い、こまかい花を咲かして居る。この花が散りすぎると青い小豆くらゐの實がなり、秋になつて熟れると、あかねをさした濃紫の液をたたへて、指さきなどに染まると、藍でしみたやうなよい色になる。私は白木綿でも染めたらといつも思ふ。

雑草園小景 その二

午後私は少し讀書に疲れたので、拾姉妹が啼いてゐるなと思ひながら、庭に出てみる。烏籠のぞいてみると壺が空なので、青桐のそばにおいてある水甕から、薄氷を割つて指先が切れさうに冷たい凍水を汲んでやる。拾姉妹は元氣潑潑たるもので、どんな氷雨のふる寒い日でも凍水で水浴をして澄んだ音色で啼いてゐる。去年の今頃私は此小鳥とすかんほと菜の花と一緒に大學病院に入院したのであつたが、その病院生活を今も猶樂しくなつかしく、拾姉妹の啼聲を、ふと朝の寝ざめにきくとき、あゝ外は霜が深いなと思ふと同時に思ひ出すのである。そうして、毎日私の病室に遊びに来ては鞠つきの眞似をしたり、幻想に浸つて獨語したり、烏籠の前に新聞紙を敷いた上に半日でも居坐つて、拾姉妹と話しかけてゐた痴人井上さんをいかなつかしく私は思ひ起すことであらう。

廊下さきの日あたりには寒竹が一株植えてある。其根に近いところにはこのあひだ款冬花と一

緒に貫つたすかんぼが植えられて、鮮緑の葉にかこまれた臙脂のやうな色をした若葉が私の食欲を示唆する。

此時うすあたたかな觸感を、私の脚に感じる。

この間麻布の犬屋から買つて來たばかりのポインターの仔犬が、尻尾を振り切りさうにしながら、すほん下の端れから少し露はしてゐる私の脚を、その軟かい舌でてんとして舐め廻つて喜んでゐる。犬もまた歡天樂土派の感興詩人である。其處へのつそりと檜の生垣を潜つて、白と茶まじりの老大なエスの奴が這入つてくる。此奴は露西亞の放浪詩人を想はせる。

この犬はもともときまつた家をもたなかつたのを、私が飼ひ馴したのであつたが、近所に私より以上の犬好きがあつて、御馳走政策で此犬をとうとう私の家から掠奪して仕舞つた。この犬は放浪性を帯びてゐるので、いつしらす自分の家だか他人の家だか鳥渡判断がつかなくなつて、とうとう私の家を他人の家にして仕舞つた。私は自然に従應しろとその家に呉れてやつたが、つい廢犬届を出さずゐるので矢張畜犬税はとられてゐる。他人の犬のために税金を納めてゐるといふことも、以前自分の家の犬であつてみれば此間に微妙な心持がある。そのエスの奴が此頃どう

思つたのか、毎日一二度のつそりとやつて來ては、庭の日あたりに寢て行くのである。此犬の心持を私は憎めない。

おや仔犬が糞をした。まだ牛乳だのお粥だのばかり食べてゐるので、人間の赤兒のやうなのをしてゐる。と思ひながら、鍬のさきで庭土ごとさらつて、さてどこへ捨ててやらうかと思廻すと、妻が病氣をして寢てゐる寢室の窓の下に、川楊がふつふつと銀鼠の花を咲かてゐるのを發見する。さうだあの根に埋めてやらうと、私はそのそばに歩みよつてみると、川楊の枝は、紅をさしてもう春をたつぷりと感じてゐる。そのそばの花壇には何かの芽が土をもたけてゐる。青い尖つた芽さきが、霜柱の下から土をもたけてゐるのである。

「あさり、あさり」といふ寒い聲がする。顔をあげてみると、生垣の外をたゆたゆと天秤をしながら黒い影がとほる。とそのあとから痛いやうな鉄の音がチヨキ、チヨキときこえて、花屋がとほる。菜の花が黄いろく、日の光のなかで、ゆらゆらと揺れてゐる。

「おい花屋さん、」と私は聲高く呼ぶ。

花屋は返辭の代りに、チヨキ、チヨキと鉄を鳴らして門の方へ後戻りをする。

私が門のそばに行かぬうちに、花屋は戸をあけて這入ってくる。

「おやおや澤山なお地藏さんですね。」と門の内側の木蔭に十體ばかりずらりと並べてある石佛を少しあきれてみてゐる。

「何かいはれでもありませんかね。」と鼻の欠けた赫顔の、足もとに山菅の亂れてゐる佛の顔を視詰めてゐる。

「これはね、雑草佛と言ふんだよ。」

私は菜の花を買つて、妻の枕もとの花瓶にさした。農民美術の馬子に添へて……。

そして、私はもうすつかり春のやうな氣分になる。

雑草園小景

その三

黒い長靴を穿き、黒いオーヴァを着て、青い手拭で頬かぶりをした人がひとり、ながい竹竿をもつて立つてゐる。

春の雪がふる。ほたり、ほたり、とふる。

樹といふ樹、葉といふ葉は、白く降り埋れ、泰山木の梢は、葉に積つた雪の重みに堪へかねて、地に着きさうに枝垂れてゐる。

泰山木の隣の青冬の葉は、ぶるぶると一顛ひ、雪をふるひ落さうとしては、それでも素直にふり積もらせてゐる。

もうほつちりと芽をうす赤く吹いてゐる木瓜のしほらしさは、雪にうもれて、いよ、いよ密かな悦びをかくしてゐる。

百日紅はまさにさららんとして光りを放つてゐる。空に明るく、八方に其枝をひろげて風にゆ

らゆらと揺れながら、かそかに青く光つてゐる。

雪に素直に従ふものは竹である。どの木よりもさきとその重みをさきにかけて、地の雪とすれすれに枝垂れてゐる。

川楊の枝のあかさはいよいよ赤く。

もつこくの葉の青さはいよいよ青く。

ユクカのながい冷たい葉の觸覚は、春の雪のうす青い味覺をいかにしみじみと味到することぞこれらの雪の風景のなかに、黒いオウバアを着て頬かぶりをした人がひとり、長い竹竿をもつて立つてゐる。

忽ち竹竿は空に渦を描いて廻轉する。

泰山木にはらはらとあたる。

青冬の葉をはらはらと拂ふ。

青笹をさつと弾きかへす。

木瓜を、もつこくを、地上のユクカを、薔薇と川楊と八つ手を、そして、椿と、ヒマラヤシ

ダーを、松と檜葉と南天と楓を、はらりはらりと打ちはらふ。

さららんとして散る雪のなかに打ちふる青竹竿の觸手は、あらゆる木といふ木、葉といふ葉、枝といふ枝につもつた雪を、さらにさららんとして打ちはらふ。

雪はもうやんで、青空がうつすらとみえて来る。

病院の廊下

青い屋根の病院に、病院の庭の枇杷の木に、枇杷の木のそばの笹の葉に、雪がふる、雪がふる、朝だ。晝だ。晝すぎだ。そして今は日の暮だ。雪がふる。雪がふる。

ばんばらん、ばんばらん。

朱い帽子をかぶつた、早發性痴呆の、變態性慾の、藪尻の、頭の禿げた赤ん坊の、えたいの知れない人間の、うたふ聲がする。

ばんばらん。ばんばらん。雪がふりますばんばらん。

ばんばらん、ばんばらん。裸でとび出せ看護婦さん。

ばんばらん、ばんばらん。わたしや井澤さんにほうれん草、ほうれん草にはつ雪だ。

ばんばらん、ばんばらん。喇叭を鳴らす兵隊さん。わたしや救世軍の士官です。赤い帽子に雪がふる。ばんばらん、ばんばらん。

朱 燦

雪。雪。雪がふる。ほたりほたりと春の雪がふる。ふる。ふる。みたまへ。庭の枯芝の上に、

枯芝のなかの黄いろい大羊齒の枯葉に、ほたりとおちてはすぐに消える水つほい春の雪だ。

私のそばには赤い山椿が大きな花壇に盛上つてゐる。

それから、石油ストーブが青い筒のなかで靜かに燃えてゐる。

私は大きな朱燦をむきはじめる。フットボールほどの大きな臺灣の朱燦だ。

私の力を罩めた指さきにふれる稍粗い亞熱帶の果物の手ざはり。やがて一皮剝けばなかはうす

紫の秘藥の包装紙、ほつかりと顔にふれてくる香氣の甘さ。

酒だ。酒だ。赤兒の匂ひだ。

雪がふる。雪がふる。ほたりほたりと雪がふる。

醉漢來たる

恰度去年の今頃である。一人の軀幹偉大な、無帽の労働者風の醉漢が突然訪ねて来て、日の暮れがたの玄關の格子戸から、顔丈なかに入れ、這入つてもよいかと言つて、何氣なく出た子供をおどろかした。私が出てみると、えらい顔をしてゐる、一見無頼の徒である。と思はせる丈けの物凄しい眼光である。「まあ這入れ」と云ふと、ぬつと這入つて來たが、それでも言葉は大變に叮嚀だ。またその叮嚀なのが、何となく無氣味な氣持にさせる。上にあけて會つてみると、最初の印象とは少し馴れたせいかも知れぬが、居直り強盜でもなさうだ。「君は誰れか」といふと、「昔新聲などに投書してゐた歌人田無泥舟のなれの果てだ」といふ。田無？ 泥舟？と二三度繰返してゐるうちに、二十年も昔の事が私の頭に浮かんで來た。

なるほどさういへば田無泥舟といふ男があつた。歌をよんでゐた。どんな歌をよんでゐたか記

憶してゐないが、先方では私のその頃の歌をよくおほえてゐるいろと話す。私はこの醉漢の話を書いてゐるうちにいろ／＼な人のことを思ひ出してゐた。何しろ二十年も前のことなんだから、人のことだか自分のことだかよくはつきりとはわからぬが、兎に角話をきいてゐるうちに、此男に多少の親しみをもてるやうになつた。それで酒を飲ませてくれといふ要求に對して酒一升だけの金をやつて、梅雨どきなので破れ洋傘を一本さしかけてやつて門の外で別れた。それから間をおいて二三度やつて來た。仕方ないので少しづつ酒代をやつては歸した。

すると年末になつて、私の不在に泥酔してやつて來て家族のものをえらく威嚇した。みな驚いて家の中にひそまつてゐると、散々に悪罵して門の外に寢て仕舞つた。そこへ學校から歸つて來た長男の透が、その姿を見ていかに驚いたか。彼は二時間も寢たので酔がさめて寒くなり、往來でどんだん焚火をし出した。少し風があつたので、前の家の健仁寸垣に燃えつきさうになる。

近所のもは驚いて交番に駆けつけた。巡查がやつて來て、引連れて行つたあとの、たそがれの道の上に猶焚火の烟が青白く残つてゐた。

私は夜に入つて歸つて來た。少し心配になつたので、矢代君や妻と相談をし、警察に様子を見

に行つて、場合によつたら、旅費を出して郷里(九州)へ歸るやうに取計らはうとしたが、警察の留置場は結局彼等の安息所であることを知つてやめにした。

さうすると、正月の四日の晩にまた突然、「先生！」と大きな聲で怒鳴り込んで來た。また來たなど少し五月蠅くは思ひながらも、年末のことがあるので、「どうしたね。」ときくと、えらい元氣で、「昨夜は野宿してきました、ウオッカを一杯のまして下さい、先生！」とどえらい大きな聲だ。そこでウヰスキーをのませたがなか／＼歸らないので、通り送つて行つてやると、人だかりがする。人だかりのするのも無理はない、裸の上にぢかに子供のマントのやうなものを着てゐるが、太い足が二本ぬつと出てゐて、頭にはごみ箱から引きずり出したやうなハンチングをのせてゐる。そして、所謂醉漢の漫罵を天に向つて浴びせかけてゐるのだから、大抵の人は逃さずにはゐられない。それを私が介抱してゐるので、どうしたのですと知つてゐる人達が吃驚して寄つて來るのだ。此晩は泥舟の友人が(これももと歌を詠んだ男で、地方で雑誌を出してゐたことがある。)市ヶ谷刑務所にゐて、その男から見ず知らずの私の處へ手紙を寄越した話をする、えらく亢奮してこれから市ヶ谷刑務所に行つてその男に會ふんだ、市ヶ谷刑務所へ、市ヶ谷刑務所へ！

と街を大きな聲で怒鳴りながらよろめいて行く。私はその後姿をみてゐて何だか寂しい氣持がした。

其後、彼は名古屋から大阪地方へ放浪して、いろ／＼の人に可成り厄介になつたらしい。が、ふとまた十日前にやつてきた。

今度はしほらしく勝手にきて、私に逢はしてくれと女中に頼んでゐる。私は二階でその聲をききつけて下に降りて行つてみると、その日は普通の労働者のやうな服装(?)をして大きな麥藁帽をかぶつてゐる。

「おい野に行かう」と言つて、私はさきに立つて歩き出した。

「先生！僕は死にます、一年で死んぢまいます。」

「さうか、それは大變よいことだ。」といふと、

「やあ。」と言つて帽子の上から頭を押へる。

「自然兒が、自然のふところに歸るよりよいことはない。君が死ぬといふことをきいて僕はほんとうに喜ぶ。といふのは、いかに醉拂ひの君でも、死をほんたうに意識したら少しは眞人間の心に

かへることが出来て、今後の一年を有意義に送れるだらう。」といふと、
「先生！ さうです。」と彼は感激して、

「僕は眞人間になります。有意義に今後の一年をおくります、だからこの本に何か書いて下さい。」
と、射的場の土手の下の道路に新聞紙を敷いてどつかと坐り、腹かけからワイルドの譯本を出して、汚れた鉛筆を添へてさし出した。

「おい、君らしくもないことをするな、人が見て笑ふだらう。」といへば、

「どうしてです、先生！」と空に筒ぬけるやうな聲だ。

「だつて、新聞紙を敷いた上に坐るなんてどうしたことだ。そんなけちな考へぢやまだ死なれないな。」ときめつけると、

「やあ。」と頭へ手をあけて、「先生！ さうでした。大地にぢかに坐るんですな。」と臀の下から新聞紙を引き出す。

「さうだ、さうだ、それで君らしくなつた。」

で、私は其ワイルドの譯本の扉に、

自然兒は、自然のふところに還元するの歡びを語つて、野の大地に坐る。

草青く、日は恍たり。

六月十日

と書いて與へると、大きな聲で讀んで有難い有難いと押し戴いてから、また先生！ である。野に行きませうと立ち上る。

で、私達は草の青い射的場の土手に這上つた。此日は日曜の事とて射的の音がきこえないので土手の上は安全である。

私は土手の上の青い草に體を埋めて、此愛すべき醉痴人と、はる／＼とわか葉した林、村落、野のはてに連亘する山脈をながめながら、いろ／＼な話をした。

此男はどうかするとえらい瘳猛な顔をする。額をぐつと狭め、眼の上に深刻な豎皺を寄せて視据えると、どうしても刑餘の人といふ凄みがある。そんな顔を見ると、私は指をすつと彼の顔に向けて、

「その顔、その顔、その顔がいけない。」といふと、ふと豎皺をほぐしてにつこりと笑ふ。その笑

顔はまるで子供のやうだ。悪魔顔と童顔が此男の質の兩面を現はしてゐる。

二

射的場の土手の上で夕日を見てから、二三日してまたふらりと彼はやつて來た。その日は來客があつたので對手になつてをられぬので、大きな夏蜜柑の糖餡あとへ五拾錢銀貨二つのせて與へたら珍らしく歸つて往つた。

それから二日おき三日おきにやつて來た。よい工合に私がいつも家に居たので、少しづつ酒代をやつては歸した。するとある晩またぐれぐれに酔拂つてやつて來た。大きな聲で門の外から例の先生！である。

出てみると、玄關の土間に仁王立ちに突立つて眼をぎらぎら光らせてゐる。

「おい、君は少し來過ぎるやうだな。」と行きなり叱りつけてやると、

「さうです、たしかに來すぎます。」と少し反身になつて片手を前にさし出して、

「然し、今晚は特に御願ひがあつて來ました。」

「いつだつて特に御願ひがあつて來るぢやないか。」

「やあさうです。」と大きな麥藁帽の上から頭を押へつけて、

「先生！ 僕酔拂つても田無泥舟です。」

「さうさ、君は酔拂ひの田無泥舟にきまつてゐるぢやないか。それがどうしたといふのだ。」

「ところで、今晚は此前きて證文を書いて行きましたのを知つてゐる……から、物資の要求は致しません。」

「では何の要求か。」

「僕を、吉植庄亮先生のところへ紹介して下さい。今夜これから行きます。これから行つて印旛沼の開墾をやらして貰ふんです。」

私は、これは困つた。どこからかいい加減な事を言はれて來たな。と思つた。

「印旛沼の開墾はまだ初まつてゐないよ。」

「いいやたしかに初まつてゐると××さんが教へてくれました。それで特に先生に紹介して貰へといふんです。」

「ほう、さうかね。それは珍らしい、吉植君がいくら詩人でもこの梅雨どきのびしよびしよ雨に開墾をしてゐるなどは初めてきく事だ。」

「いいやさうです、先生は僕に匿してゐます。」と頑張る。

「酔拂ひの田無泥舟は馬鹿だな。僕のいふことを信じないで嘘と思ふか。」と少々癢に觸つた。すると、彼は例の險悪な堅皺を額にぐつと寄せて、きつと私の方を睨めかへしてゐたが、突然、さりと皺を解いて、破顔一笑。

「や、先生！ 解りました。僕は先生を信じます。」とどかりと上り框に腰をおろして、腹掛の井から一つの青い南瓜をとり出して壘の上においたものだ。

「すみません、先生を疑つてすみません、で、これをあけます。」とまた腹掛をさぐつてゐたが、泥だらけになつたバクパンを二三本とり出して、

「これもさしあけます、どうかたべて下さい。それからまだ先生に特に進上するものがあります。これです。」と腹掛の底の方から新聞紙に包んだ一握の土を取り出した。大きな野生の車前草の葉が少し萎えて、小夜ふけの灯かげにきはだつて青く見えた。

「僕、今日ねてゐました。酔拂つて土手の上にねてゐました。顔のところをみるとこの車前草が生えてゐました。それで先生を思ひ出して土ごと持つてきたのです。井鉢か何んかに植えて下さい。」と如何にも嬉しさうだ。これを見て、私はすっかり今迄の不機嫌を直して仕舞つた。そこへ恰度矢代君がやつて來た。

「そうら吉植君の近況をよく知つてゐる人がきた、念のために此梅雨時開墾を初めてゐるかどうかきいてみることだね。」

「やあ、もうあやまります。」と頭を押さへてゐる。私は臺所へ行つてビール壘を一本さげてきて、「さあ、これをもつて今夜は有隣俱樂部へ歸つて寝るとよい。」と口を抜いてやる。

この有隣俱樂部といふのは一晩泊り丈が二十錢、一日三食で七十錢でおいでくれる無産階級の宿泊所で、十二社にある。そこへ彼は寝とまりして、私が、働け、働け、と雑誌の裏に書いて渡したのを信條にして、此頃土工をしてゐるとの事である。私はこの前きた時それを聽いて少なからず喜んだ、そして、もう一年きりか生きないといふこの自然兒のために、その遺稿を編んでやるから歌を詠んだら持つ來たまへと眞面目に言つてやると、彼はその次ぎに果して歌を持つて來

た。その歌をここに紹介する。

○信濃の旅にて

青き靄は溪にこもらひあかときのかだかけの鳴くが一つ二つきこゆ

○故郷にて

たくまぬの仁津の大沼おほぬの葦雀音にはこもれりの水霧のなかにぎりたる一つの錢のぬくもりにこの労働の心ながめつ

それから有隣倶楽部に泊つて、

甘干しや漁人孤ならず隣あり

といふ古い自分の俳句を思ひ出したといふのである。

それから五六日の間、彼は訪ねて来なかつた。どうしたか知らんと思つてゐると、ある晩、十
一時頃、ほとほと門の戸を敲くものがある。そばに雑誌を讀んでゐた妻が、きき耳をたてて、
少しおびえたやうな表情をした。

「田無です、また来ましたよ、こんな夜更けに。」と言つて私の顔を見る。さういへば、門の戸を
敲きながら、先生！ 先生！ と言つてゐるのがきこえる。私は原稿を書いてゐる時丈は如何に
何でも我慢が出来ぬ、ましてこの夜更けである。いきなり立つて行つて道路に面した窓の戸をあ
けた。

「誰だ、こんな夜更けに。」と言放つた。

「僕です、先生！」

「僕ぢやわからん、誰れだ。」

「田無です。」

「田無か、何の用か知らぬが、僕は今仕事をしてゐるから困る、ましてこんな夜更けに……また
明日来い、今夜は歸れ。」といふと、

「何？明日来い、ふふん、明日来いたあ俺を馬鹿にしてゐるな。歌人だの何んだの言つていい氣
になつてゐるな。」といふ言葉がきこえたので、私は我慢出来なくなつて下に降りて行き、閉めて
あつた玄關の戸をガラリとあけて門の外へ出ると、深々と嗜れて潤い夜空の下に、彼は豪然と突

立つてゐた。私は此奴は竹煮草だと思つた。

「困るぢやないか、こんな夜更けに。」といふと、

「さうです、困ります、僕は今夜生命がいらぬ人間です、これです。」と胸に指をあててみせる。

「三番組、筒先といふんです。」

みると、どこで貰つたか消防夫の印纏天を着てゐる。夜眼にも白く襟の文字が見える。

「まあいいから歸れ、僕が其處まで送つてやる。」と言つて先きに立つて歩き出したので澁々後に
跟いて来る。

「醉拂つても田無泥舟です、明日来いなんて言はれると腹が立つ。草や木よりこれでも少しはましな人間です。」

「明日来いと言つたのは寧ろ親しみをもつてる言葉だ。汝が草や木より傑れた人間だなどと思ふと大間違ひだ、吾々は草木と同じなのだ、むしろある場合には草木にも乏つてゐる。草木は夜になれば眠る、風がふけば風の吹く方に素直になびく。汝は夜中に醉拂つて来て、大事な僕の仕事の邪魔をする。その上に怒る、それで草木にまさつてゐると思ふか、そら風が向うから吹いて來

た、さあ風の方へ早く歸ることだ。」

街路に出ると、今日は今年中での高温度を示した暑い日だったので、涼臺を持ち出して涼しんでゐる人が五六人酒屋の店さきにある。私を見つけて

「こんなに夜更けにどちらへ、」と言葉をかける者がある。

「いやこのお客さんを送つて行くのです。」と田無の方を指さすと、彼は有繫に大きな帽子に顔を匿くしてくと野鴨のやうに笑つてゐる。

新宿方面に行く路次を這入つて一町ほどしてから、

「おい、君は僕を甘く見てゐるが、もう君との友人附合は御面だ。さあ歸れ、有隣俱樂部に歸つて、おとなしく寝て明日は働きに出るとよ。」

「先生！ 僕は金がありません、金を下さい。」

「金を下さいつて、こんな遠いところ迄送つて来てやつたんだ、おとなしく歸れ。」

「でも有隣俱樂部は二十錢出さなければ泊めません。」

「何でもよいから早く歸れ、僕は仕事をしなければならぬ。」

「すみません、それでは僕はこゝへ寝ます。」と道路の真中に纏天を脱いで、その上にごろりと横になる。私はそれをみて、平気で歸るわけに行かなくなつた。

「仕様のない大きな赤ン坊だな、ほんとに困つた竹煮草だ。仕方ない、ぢや僕の家までまた戻るか、錢なんてここには持つてゐはしない。さあ起きておいで。」私は肩に手をかけて揺つた。

「起きます。起きます。」と頗る元氣のよい聲だ。其處で私はまた涼臺で涼しんでゐる人達の前を、深夜の放浪者を連れて通つた。人々は何か言つて笑つてゐた。そして家に歸つてみると、妻は心配して玄關に立つてゐた。

私は上にあがつて妻に五十錢出させ、門の外に待つてゐる彼の掌の上ののせて、

「おい三十錢おつりだよ。」

「いや。」と彼は頭を手で押へた。

彼は何度も何度も僕は悪人です、すみません、と頭をさけて歸つて行つた。

私はふらふらと歸つて行く彼の後姿を夜空の光りに透してみて、いつか「僕には故郷がありません。」と言つた彼に向つて、「君の故郷は大地だ。」と彼の立つてゐる地面を指した事を思ひ出してゐた。

三

田無泥舟もかう毎號書かれては迷惑するだらうと思ふが、前號のまゝでは諸君も鳥度不安心を感ずるであらうし、私も亦書き足りぬから、もう一度書くことにする。たゞ困つたことには田無泥舟のことが意外に反響があつて、おまへが好きになつたと言つて、突然見も知らぬ男に坐り込まれた事だ。を好きにならずにどうか泥舟を好きになつて貰ひ度いと思ふのだが、世はまゝならぬものだ。

さて、彼は、七月半ばのある夜ふけに、私をおびやかしてから一週間ほどして私の不在に二度やつて来たが、子供たちももう馴れて怖れず、

「お父さんがお留守だから早く歸つてくれ。」と追ひかへした、といふことを歸つてからきいて、泥舟も追々彼の本質を露出して来たたと笑つた。

三度目に来た時は私は家にゐた。出てみると、其日は餘りに酔つてはゐなかつた、どうしたと

いふと、△△の警察に浮浪罪で四晩拘留されてゐたといふ。

「どうだ、面白かつたか。」

「△△の警察はなか／＼親切にしてくれます。夜は蚊帳を吊つてくれますしね。けどその蚊帳に大きな穴があけてあるので餘りたいたしにならないんです。」と額に堅皺をよせる。

「君ひとりではいつて居つたのか。」

「いや泥棒と二人でした。その泥棒がいふのには、戸山原のかういふ處の草のなかに着物二枚と拾五圓ほどの品物が匿してあるから、君が出たら、すまないが探して届けてくれつて頼まれたので、昨日放還されたから早速行つて探すと、なるほど風呂敷に包んで草のなかに隠してありました。それを泥棒のいふとほりに三四十分前に出たばかりの警察に持つて行くと、充分と叱られたりおどされたりしてまた一晩放りこまれました。はつはつはつ。」と嬉しさうである。そして、留致所でこんな歌が出来ましたと言つて、鉛筆をなめ／＼雑誌の裏に書きつける。

○冬青の葉の夜を深みつゝ物おもへばかな／＼の聲二度きこえけり

○ゆあみ終へて房にかへればかな／＼の聲きこえけり空すみにけむ

さて、愈々泥舟に別れる日が来た。八月初めのある薄暮、晚餐をたべてゐると誰か門の戸をあけて来たやうだといふので、子供が出てみると、私が直感してゐたやうに矢張りそれは泥舟であつた。泥舟は泥舟だが、今日は何だかいつもと違つて、玄關の前でびよこ／＼お辭儀をしてゐると子供は可笑しさうに笑つてゐる。出てみると、なるほどお辭儀をしてゐる。いつもとは聲もすつと低く、いかにもおど／＼としていぢらしい程である。これば泥舟の酔はざる姿かと思ふと何だか呆氣なく、また寂しくなる。酔はなければ善人なんだ、今迄のはみなアルコールの作用だと知れると、寂しくなると同時にをかしくもなるし、張合もなくなる。

「私は、あの……郷里にかへることにいたしました。」

といかにも物あはれである。

「君にも郷里があつたのか。」

「え、熊本在にあります、母と兄と妹とが家にゐて百姓をしております。私はもう歸りたくありません。東京にゐて皆さんに迷惑ばかりかけてゐて……すみません。」としほ／＼としてゐる。

私はすっかり醒めたる泥舟に驚かされて仕舞つた。ほんとうに故郷を思ふ人間の心がわかるやうな気がした。で、お別れに蕎麥を御馳走して、雨のばら／＼こぼれて来た秋ちかい感じのする宵を、私は國にはるばるとかへる男と家を出た。そして品川の驛まで送つて、切符を買つてやつた。そして、彼の汽車の出る迄、ぬれたブラットホームに立つてゐた。

私は歸りの電車のなかで、醒めたる彼の餘りに善人であり、餘りに弱い心の持主であるのを考へた。

同郷人

土用明けの日がぢりぢりと庭土に照りつける午過ぎ頃、突然私を訪ねて来た軀幹矮少の、眼だけぎりりと光つてゐる職工體の男があつた。

「私は島田守太郎です。」と悪びれずに言放つて、私の眼をぢつと視据えるやうにした。

島田守太郎！ 私はどきりと感じた。とうとうやつて来たと思つた。が、どうせやつて来たからは玄關先きで歸る男ではありえないと、

「どんな用事か知らないが、まあ上りたまへ。」

と言つて玄關側の應接間に通した。夏冬据えどほしにしてある、青い斑らのる瀬戸の大火鉢を中にして對坐した。そして、この男が〇〇爆彈事件の懸疑者であつたのかと、ぢつと視返してやつた。彼の額には、確かに刀痕と思はるれ疵あとが太い左の眉の上に喰入つてゐた。

彼が初對面の簡単な挨拶をして顔をあげた時、私が彼の眼をぐつと視詰めたので、少しく出端

を摧かれたやうな、そしていまいましいといふやうな表情をちらりと見せた。

「いや突然驚かして恐縮です。既に私の名前は例の事件以來御承知の事と思ひますし、ことによるとんだ御迷惑をかけてゐるかも知れぬと思はれたので、今日實は偶然御門の前を通つてつひ御訪ねする氣になつたんです。とんだ闖入者となつたわけですが、同郷者の交誼として許していただきたいのです。」

見た處二十四五歳にしては、きつぱりした物の言ひ方である。

「いや迷惑といふ程のこともないが、あの當時二三度刑事が訪ねて来て、君の居所を知つてゐたら教へて呉れと、可成りに執念深く訊問的に要求されたが、實のところ私は君の名さへそれまで知らなかつたのでね。一體郷里には君と同姓の家が十數軒あるが、島田守太郎なる人の存在を私は刑事に向つて此方から訊問した位でしたよ。刑事も有撃にけるんとして歸つて行きましたがね、一體君は、」

と言つて、私はまたぢつとその額の疵を視て、

「君は、一體あの事件とどういふ關係があるのです。そして君が今迄の踏んで來た道は……。」

と私は疊みかけるやうにして質問した。するとその男は、烏渡頭を搔く眞似をして、ぶつりぶつりと〇〇爆弾事件の懸疑者となつた顛末——それは彼の印刷職工であつた當時、彼と同じ下宿に眞正の犯人が止宿してゐて、彼と交誼のあつた爲めであるといふ事實を簡單に語つて、

「卷添へ喰つてはたまりませんから、滿洲へ高飛びして二年ばかり放浪して來ました。で、その支那土産はこの額の疵とこれです。」

と粗い筋の喰入つてゐる、ただ廣い右の掌を押開いて、私の眼のさきに突きつける。

よごれた荒地のやうな掌には、かつきりと十字の形が肉に刻まれてゐた。

「支那北方官憲の十字形といふ奴がこれです。私は、額をぶち割られた上に、監獄に三ヶ月も打ち込まれて、漸つとの事で一ヶ月前に追放される時、刑餘の人としての目印に貫つたのがこの烙印です。」

と言放つて高らかに笑つた。

「で、君は一體どの島田家の人です。」

と私の少し咎める様にした質問に對して、彼は冷然として、

「いやつまらん奴の悴です。貴君は田中の島田先太郎といふ男を御存じですか。あの大きな櫛のある家です。私は先太郎の悴です。いやこれは人の噂ですがね、私の母は蛇に取り馮かれて私を産むと直ぐに死んださうですよ。」

男は眼をきらりと光らせた。その光がほんの瞬間的ではあつたが、私の額を痛い程刺した。

私は今明かにこの男の母なるおみとを思ひ出してゐた。蛇に取つかれた若い女の運命を、荒蕪した郷土を、不思議なる幻想を、明るく照りつける庭の日光のなかにまさまざと見るやうな氣がした。

蓬々と風に吹かれてゐる枯草の塚が一つ。村はづれの野中にある。塚には一本の標札が立つてゐる。標札には一面に蛇の繪が黒々と畫かれて、端の方に〇〇村字田中、島田みと二十三歳とある。裏には蛇を封じた祈禱者の名と赤い大きな四角な判が捺してある。

私の少年の日の記憶はこの塚から展開せられる。

おみといふ女を私は今もおほえて居る。隣村から嫁に來たときから、あの女には蛇が馮いて

ゐるといふ噂があつたことも、家の下婢からきかされた。色がほつてりと白く、農婦としては稀れな若々しい女で、髪の毛などもいつも持ち扱うてゐる程長く、立つと地に藉く位であつた。おみとの夫は平凡な農夫で、唯野良に出て働くより以外に小唄一つ唄へなかつた。

六月の日盛り、麥は熟み野は一帶に夏霞がして、地は焼けつく程熱してゐる。麥を刈りいそぐ農夫の姿がいたるところに點々として見られる。おみとも夫につれられ、雇女と一緒に、晝まで一反歩も刈り終へた。餘りに疲れたので夫とふたりして晝飯後を畦の赤楊の下蔭に行つて、涼みながらつひうとうと午睡をした。

おみとは村祭の里神樂でみた何々の尊を夢にみた。青くきらきらした衣裳をきて、烏帽子をいだけいた、光る程美くしいその尊は、手に劍をぬいて、寝てゐるおみとの腹にさしつけた。おみとは尊を怖いといふ心持は少しも起らずに、ただ眩しく羞かしくて口が利けないのだ。尊はちらちらと光る涼しい眼で女の顔をぢつと視詰めながら、「胎の兒をくれたら汝の願ひをかなへてやる」と優しくいたはるやうに言ひかける。女はただ氣をわくわくさせて返辭さへ出來ない。するといきなり尊は女の下胎に劍を深くつき刺した。きやつと叫んで女が眼を開いた時、五六尺もあ

る青い蛇が女の腹をしめつけてゐた。そばに寝てゐた夫は驚いて起る上や否や、いきなり麥刈鎌で蛇を三つに打切つた。

女はぐつたりと青白く疲れて立つことが出来なかつた。夫に負はれて家に歸つて床についたまゝ、絶えず熱にうかされて嘔語ばかり口走らせてゐた。

「蛇、蛇！ そらそこにゐる。わたしの腹にまきついてゐる、足にまきついてゐる。乳房にかみつかうとしてゐる。」と叫ぶかと思ふと。

「尊さま、妾の好きな尊さま、妾は何もいへませんの、どうにでもよろしいやうに……どうぞ尊さま……。」とうつとりとして眼を細くあいて夫の顔をみてる。

「私は腹を耗かしてゐるんですがね、實は今日まだ何にもたべてゐないのです。何か御馳走をして貰ひたいものです。」

といふ男の聲に私の幻想はふと現實に轉換せられた。男は烟草をすばすばと喫つて私の方へ烟を吐いてゐた。そこで、盛蕎麥を取りよせて二人で喰べた。

「ビールが欲しいですな。いや鐵管ビールで結構です。」

といふので、青い土瓶に一杯、コップを添へて差出すと、勝手にとくとくついでは飲み、注いでは飲みして殆んど小一舂も飲んで、腹を前に突出してよれよれになつたバンドを緩めた。

「僕、今夜の夜行で神戸に出發します。いや實は一昨日東京から着いたばかりですが、東京は五月蠅くて到底落着いて居られませんや。また支那行です、支那は僕を刑餘の人としてに十字型の焼印まで土産にくれましたが、面白くて仕方がない。何と言つても活動出来るのは支那に限る。」

と言つてまたコップの水をがぶりと飲んだ。そして、私が紙に包んで出した僅かの烟草錢をポケットにねぢ込んで、

「それでは失禮します。實はこの近所に支那浪人の主領がゐるので訪ねた處、その男は昨夜神戸に出發したのです。それで少し失望したので、野へでも行つて一寢入して行かうと思つてここを通り掛ると、貴君の名札が出てゐたので突然同郷のよしみで訪問したわけです。」

と言つて泥護謨靴をぢかに穿いてから、ハンチングをばらばらと亂れそそけた蓬髪の頭にのせ、よれよれになつた黒のアルパカの後姿を見せて、ふらりと歸つて行つた。

私は送り出してから部屋に戻つてみると、彼の飲み残しの水が盆の上のコップに半分ほど澱んでゐた。其コップを手にとると生温く指に感じた。私はその飲み餘しの水をさつと庭の草にかけた。

卷末小記

本書に収めた赤い山以下數十篇の作品は、主として大正十五年及昭和二年の執筆にかかり、雑誌「日光」に掲載したものが多し。「日光」以外の雑誌に出したのは、「近代風景」「改造」「橄欖」「短歌雑誌」其他である。
本書の装幀は恩地孝四郎君を煩はした。「緑草心理」「烟れる田園」と同じ感じて統一したかつたからである。製版所が原畫を紛失した爲めに、同君にはいろ／＼と面倒をかけた。恩地君の厚意を心より感謝する。

昭和四年三月上旬

雑草園にて 前 田 夕 暮

6
7

雪と野菜

二五八



雪
と
野
菜

昭和四年三月二十日印刷
昭和四年三月廿五日發行

著者 前田 夕暮

發行者 前田 洋三
東京市外西大久保一八二一

印刷者 金山 佐次
東京市下谷區谷入町三六九

定價 金壹圓八拾錢

發行所

東京市外西大久保一八二一
振替東京二六一六三

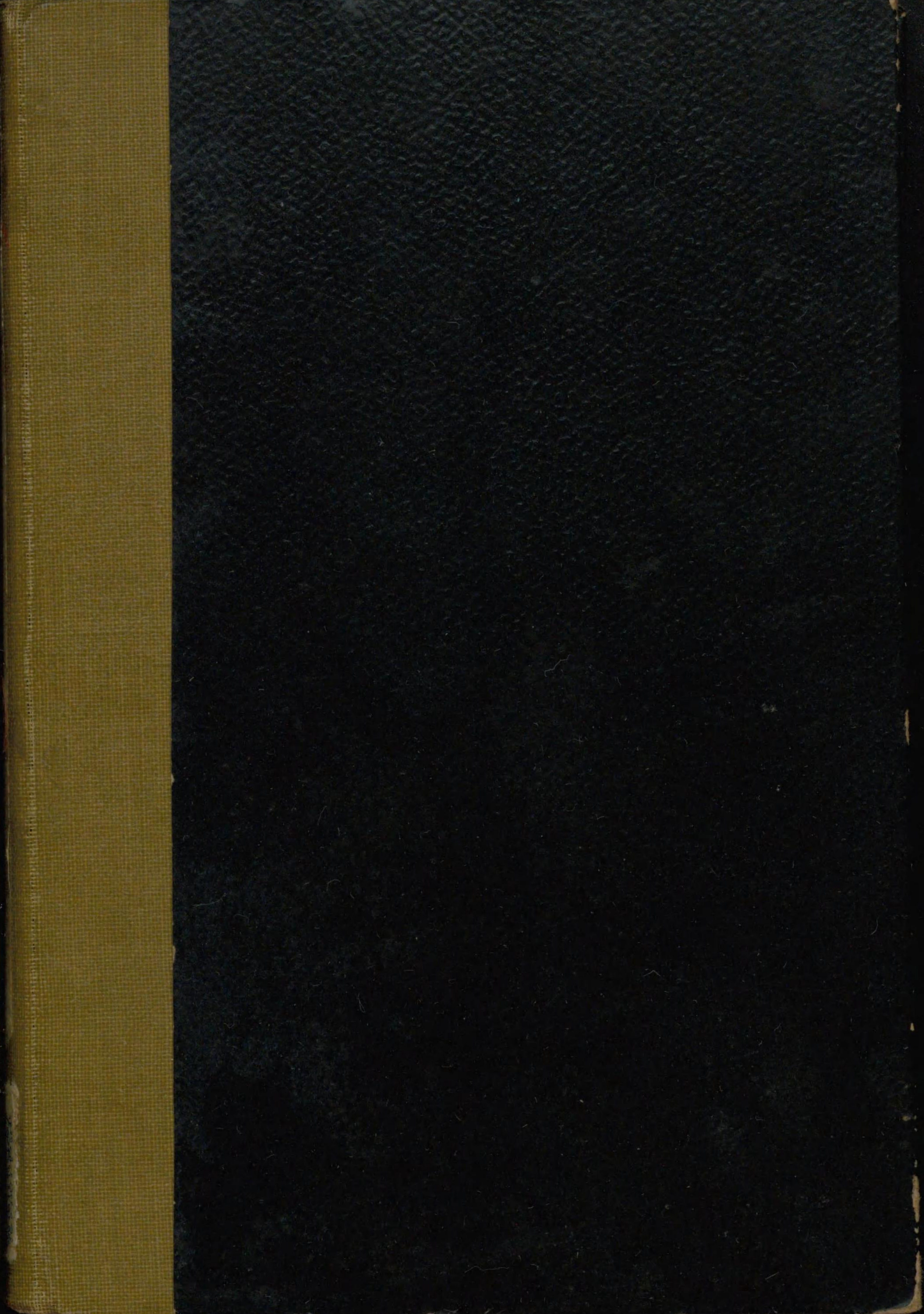
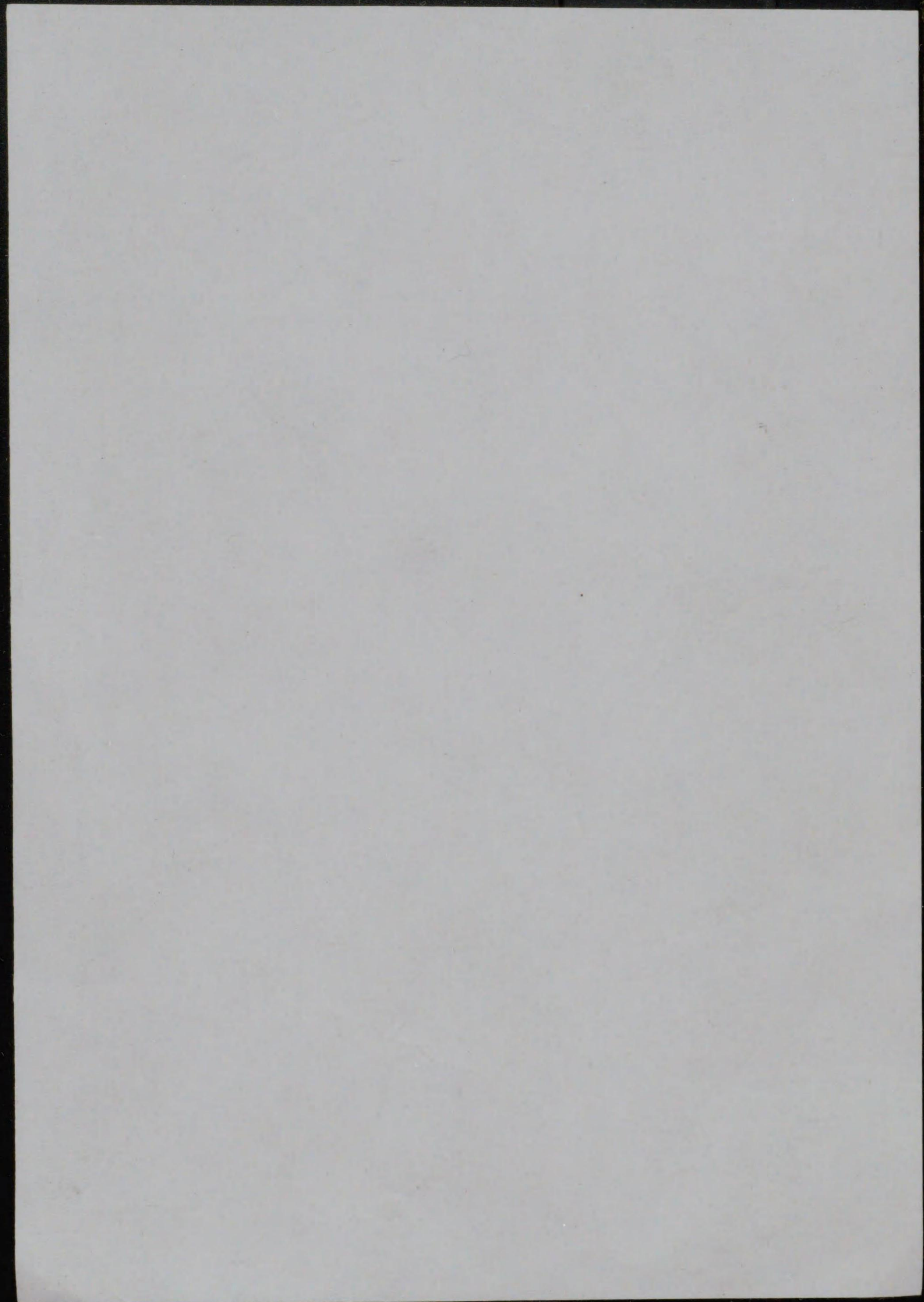
白
日
社

前田夕暮著作目録

散文集	緑草心理	大正七年	ア ル ス
〃	烟れる田園	大正十五年	同
〃	雪と野菜	昭和四年	白 日 社
パンフレット	哀樂	明治四十年	同
〃	疲れ	明治四十四年	同
歌集	收穫	明治四十三年	易 風 社
〃	陰影	大正元年	白 日 社
〃	生くる日に	大正三年	同
〃	黒曜集(選集)	大正四年	植 竹 書 院
〃	發 生 (白日社歌集)	〃	白 日 社

6
6

613
64

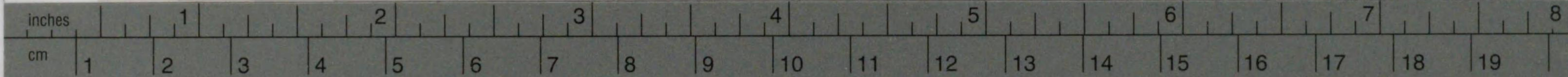


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

